

保護水面調査

水野知巳・石川貴朗

目的

二見町沖に設定されている貝類（アサリ）保護水面及び藻場保護水面において、保護水面を管理するうえの基礎資料を得るための調査を行う。

方法

1. 貝類（アサリ）保護水面調査

保護水面内の12測点で、アサリの分布、生息量、殻長組成及び底生生物の生息量調査を6回行った。これと対応して、水質調査（水温、塩分、pH、DO、COD、栄養塩類等）及び底質調査（粒度組成）を各2回行った。また、産卵期調査として、成熟度調査、浮游幼生調査を実施した。

2. 藻場保護水面調査

保護水面の周辺域の環境を把握するため、水質調査（水温、塩分、DO、COD等）を測点2において、毎月1回、底質調査（粒度組成）を5測点において年1回行った。また、保護水面内及び周辺域で底生生物調査を5測点で7回、刺網による漁獲試験を4測点で7回行った。さらに、藻場の繁茂状況等を把握するため、3月に潜水による人工魚礁調査、周辺域の藻場分布調査を実施した。

結果及び考察

1. 貝類（アサリ）保護水面調査

保護水面内の干潟域におけるアサリの分布は、4月が最も多く、例年多い夏期に減少傾向がみられた。生息分布をみると昨年より減少していたが、滞筋は増加傾向を示した。最近の推定生息量の推移を図に示したが、今年度の推定生息量は4月28.6トン、6月24.1トン、8月25.5トン、10月27.9トン、12月27.1トン、3月23.7トンで、20トン以上の生息がみられた。

その他の貝類では6種類が確認され、このうちシオフキ、アラムシロガイ、ユウシオガイはほぼ全測点にみられた。特にシオフキが8月の調査時に大量にみられた。貝類以外の底生生物は稚ガニ、ゴカイ類がみられた。

底質は各測点ともここ数年変化が無く、粒度0.25～0.125mmの微細砂が60～80%を占めており、粒径0.125

mm以下が10%前後であり、泥分傾向は徐々に解消しつつある。

浮游幼生数が10月に最も多かったことは9月のアサリ成熟度とほぼ一致し、アサリの産卵盛期があったものと推定される。

2. 藻場保護水面調査

水質調査及び底質調査結果から各測点とも、大きな変化はみられなかった。底生生物調査では採集した種類はアサリ、バカガイ、ホトトギス、ゴカイ類、イトゴカイ類、スゴカイ類、アラムシロガイの7種類であった。カレイ刺網による漁獲試験では、漁獲された主な種類はイシガレイが48個体と最も多く続いて、アイゴ18個体、マゴチ14個体であった。なおこれ以外の水産有用種として、マコガレイ、クロダイ、コウイカ等が採集された。

3. 人工魚礁調査

昭和47～58年にかけて投入された並型魚礁及び自然石による築磯への藻類繁茂や他の生物の生息状況を把握するため、潜水による調査を行った。今回棘皮動物のハスノハカシパンの異常発生がみられ、下の砂地が見えない部分があるほど分布していた。砂地には、アサリ、ムラサキイガイ、ウチムラサキ、バカガイ、タイラギ、マテガイ、ヤツシロガイ、ツメタガイなどがみられた。魚類としては、メバル、メジナ、ハゼの3種類がみられた。繁茂している藻類は緑藻類4種類、褐藻類2種類、紅藻類19種類であった。

4. 水面周辺域の藻場分布調査

水面周辺域のアマモ場の分布は前年度と同様に宇治山田港内の右岸で密に生息しており、水面内及びその陸側にも点在してみられることが確認された。大型褐藻類のホンダワラ類は昨年と同様に二見ヶ浦の岩場及び松下沖の潜堤での繁茂が確認された。

5. 漁獲量調査

水面周辺域の水産物の資源量の変動を把握するため、水面周辺を占有漁場としている二見町漁業協同組合の主要漁獲物の経年変化を表に示した。この地区で漁獲される主な種類はカレイ類、シロギス、クロダイ、アナゴ、アイナメ及びクルマエビであり、貝類ではアサリ、バカ

ガイである。魚類ではカレイ類の漁獲量が最も多く、年間6.7～26.8トンの漁獲があり、最も安定している魚種である。

一方、貝類の漁獲についてみると、アサリは年間233.3～874.9トンの漁獲があり、最も安定していた。バカガイの漁獲量は年変動が非常に大きく、最近10年間の漁獲量をみても0.1～2913.1トンであり年変動は大きい事がわかる。

以上のように保護水面周辺域を漁場に行っている二見町漁業協同組合の漁獲量調査からもカレイ類の漁獲が最も

多く、カレイ刺網を使用した漁獲試験からもカレイ類の漁獲が約50%を占め、水面周辺域はカレイ類の漁場が形成されていることがわかる。また、水面周辺域ではアサリの漁獲が安定しているほか、バカガイ等の繁殖もみられ、今後とも漁場管理を十分行い、資源の安定維持に努める必要がある。

関連報文

三重県：平成11年度保護水面調査報告書 (アサリ・藻場)